



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

研究者の間で「遺伝子組み換え実験のバイブル」と呼ばれている本がある。マニアティスらが著した「分子生物学実験マニュアル」(原題を意訳)という本だ。全3冊に分かれていて、この領域の実験法すべてを網羅している。読むときに

場所をとらないように樹脂製のリングでとじてあり、見たいページ以外を後ろにぐるっと回すことができた。必要な実験法のページだけを開いて傍らに置きながら実験することもできて便利だ。平易な英語で丁寧に書かれていて、巻末の付表にはさまざまな緩衝液や試薬の調製法までまとめら

ることに気付いた。医局秘書に尋ねると、若手の講師の先生と大学院生たちが古い本を整理した時に一緒に捨てたことだった。なんと罰当たりな。若い人たちには、古い英文の本より新刊のハウツー本や攻略本のほうが魅力的なようだ。一から準備して先の見えない実験をするよりも、答えが分かっている

<50>「遺伝子組み換え実験のバイブル」

二十数年の大学勤務期間中、外来や手術の傍ら基礎医学の研究を自ら行っていた。実験は思ったようにいかないことが常だ。実験に行き詰まると、いつもこの本をひもといた。必ずヒントがあり解決法を見いだすことができた。ある時、この本が医局の実験室の本棚から消えてい

結果が約束されたもののはうがよいようだ。遅くまで実験室に残っていつ終わることも知れない研究を続けるのは全く効率の悪い無駄なことだ。医師の仕事ではないと思う人も多いだろう。自分の手で試薬や材料を用意して遺伝子やタンパク質をコソコソ研究する生化学は、なかなか結果が出ない言葉である。

英国の詩人ウィリアム・ブレイクは、彼の詩「無垢の予兆」の冒頭で、「一粒の砂にも世界を、一輪の野の花にも天国を見、君の掌のうちに無限を、ひと時のうちに永遠を握る。」(松島正一編、対訳ブレイク詩集から引用)と歌っている。この一節は有名で、映画「トゥームレイダー」や「博士の愛した数式」に登場する。私にとっても未知なる真理の扉を開けるおま